
ごめんな、神様 2

水城由羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「めんな、神様2

【ZPDF】

Z0609E

【作者名】

水城由羅

【あらすじ】

東が連れてきたのは姉と瓜二つの四方谷美波という少女だった。動搖する北斗。しかも美波はとんでもないことを言い出し・・・

「ただいま！」

キッチンで水を飲んでいると、玄関から威勢の良い声が響く。東か。そういえば試験期間中とか言つてたもんな。

「おう、おかえり。」

廊下に出て東に声をかけた。

「え？」

俺は目を疑つた。別に東を見て驚いたわけじゃない。東は別にいつもと変わりない。

「兄貴！この人がこの前はなした転入生。遊びに来たい。って言つていたからさ、連れてきちゃつたんだ。今日で試験終わりだし、良いよな。」

「お。おう。」

東の隣にいる女の子、姉さんそつくり、いや姉さんそのものじゃないか！

「初めまして。四方谷美波です。」

ミナミ：名前まで一緒かよ。東は四方谷さんにリビングに上がるよう勧めていた。一人がリビングに消え、程なくして「ただいま」と静かな声が聞こえた。

「北斗兄さん？何やつてんの？」

へたり込んでいた俺の目の前に西也が現れた。不思議そうに俺をじつと見つめる。

「西也」

「玄関に女物の靴があつたけどあれお母さんのじゃないよね？」

「この前、東が話してた転校生が遊びにきたんだよ」力なく答える。西也はぱつと明るい表情になった。

「へえ。会いに行こうっと！」

西也もリビングに入つていった。俺は、溜息を一つつくと、三人に

ジユースでも出やうとキッチンに戻った。

「皆、ジユース用意したぞ。」

ジユースを持つてリビングに行く。四方谷さん見れば見るほどやつぱり姉さんにそっくりだ。

「サンキュー！兄貴」

「ありがと、兄さん」

「ありがと、北斎さん」

優しく微笑む四方谷さんに姉さんの面影を重ねてしまい胸が高鳴つた。

「い、いや。」

四方谷さんの言葉と同時に東は変な顔をしていた。

「どうした？ 東」

「いや、オレ、四方谷に兄貴の名前教えてないよなって思つて」
すると四方谷さんはまずつたと言つ様な表情をし、そっぽを向いた。
俺も東も西も眉をひそめてその様子を見ていた。

「四方谷さん？」

「あー、もう。やめたやめた！」

そう言つと四方谷さんは両手両足を伸ばした。その豹変振りに俺ら兄弟は開いた口がふさがらなかつた。

東の話じやおとなしいお嬢様っぽい子つて話だつたんだが…。すぐつと立ち上がると次の瞬間信じられないことを言い出した。

「久しぶり＆初めてまして！ 我が弟達」

俺たちは開いた口がふさがらないまま見つめついていた。誰が誰の弟だつて？

「北斗、忘れちゃつたの？ 十五年前まで一緒だつたじゃん」

「もしかして、姉さん？」

「ピンポーン！」

その言葉に西也があずあずと拳手をした。

「あの、南姉さんは十五年前に亡くなつたと聞いているのですが」

「うん、死んだよ」

何ヶ口ツと言つてんだ！ そう、確かに十五年前に亡くなっているんだ。姉さんの葬式も覚えているし、毎年墓参りにも行つている。墓石にだつて名前が刻まれているんだ。

「懐かしい感じって、四方谷が姉貴だつたからなのか
やつと話した東だが未だ信じられないといつような田つきで四方谷
さん、もとい姉さんを見ていた。

「でも、オレ姉貴のこと知らなかつたのにな」

「東見たとき北斗に似てるなつて思つたんだ。んで苗字聞いたら四
守だつて言つじやない。そんな珍しい苗字つちしかないつて思つた
んだよね」

「それより、南姉さんは何故・・・えつと、前世と言つべきなので
しょうか？ その記憶を持つてゐるんですか？」

「いい質問だね！ えつと...」

「西也です。」

「うん、西也ね」

西也に一囗リと笑うと話を続けた。

「ちょっと事情があるんだよね。天国にホントに神様いるんだよ。
神様が私の事情わかつてくれてそれで天国に呼んだつーか、それで
神様は私のために私の記憶を持ったまま四方谷美波として転生させ
てくれたって訳」

ちらりと姉さんと田が合ひ。事情？ のために神様が姉さんを呼んだ？ どういう事だ？

「ま、この家にいる時は田守南つてことでヨロシクね！ 東はどうあ
えず私とタメでしょ。西也は？」

「二個下です。」

「んで、北斗が...」

姉さんが俺に田を向けた。

「...五個上」

小さな声で呟きながら田を逸らした。

「あの頃は私のほうが一個上だったのにね」

寂しげに頭を伏せる。俺たちは何も言えなかつた。だが、姉さんはすぐにさつきと同じような明るさに戻つた。

「ま、しょうがないよねー私の我儘みたいなもんだし。あ、父さんと母さんにも会いたいな。今日、夕飯食べていっちゃダメかな?」「オレ達の姉貴なんだろ?何を遠慮することあるんだ。な、兄貴、西也」

東の嬉しそうな表情に俺たちも笑顔で頷いた。

その後、夕飯の仕度をしていると父さんと母さんが帰ってきた。やつぱり最初姉さんの姿に驚き姉さんが理由を話すと、父さんと母さんは姉さんを抱きしめ泣いていた。

十五年ぶりの再会だもんな。

夕飯時、俺の向かい側の空いていた席に姉さんが座つた。十五年ぶりに全部の席が埋まつたのだ。初めて家族六人が揃つた。

昔のように父さんと母さんと楽しそうに話す姉さん。

外見も昔の姉さんをそのまま大人っぽくしたようだつだ。

心は姉さん。だけど、ここに存在しているのは四守南ではなく、四方谷美波という別の人間。

いくら心が昔のままで俺は姉さんにもう一度恋をしてもいいのか?俺は、今でも姉さんが好きだけど、姉さんはたつた一人なんだ。その姉さんは十五年前に死んでいるんだ。今ここに存在しているのは、心は姉さん、体は別人なんだ。

「北斗、バイト行くついでに南を送つていきなさい」
夕飯が終わり、バイトへ行こうとする俺を父さんが引きとめた。

「あ…ああ

「へえ、北斗バイトしてるんだ。頑張ってるんだねえ」

「あ、うん

笑顔は姉さんそのものだ。胸が苦しくなる。君は姉さんであつて姉さんではないんだろう。

バイトまでの道を一人無言で歩く。姉さんは何か言いたげに俺を横目で見ていた。

「ねえ、北斗」

ゆっくりと優しく名前を呼ばれた。昔のように。

「私が死んだの、自分のせいだと思っていたの？」

図星の言葉に俺は立ち止まって姉さんを見た。

「さつきも言つたけどあれは、私が神様に望んだこと。神様はそのために私をあの日死なせたの」

悲しそうに微笑む姉さん。俺は自分の両手を握つてその表情をにらみつけた。

「……んで、なんで。姉さんはそんなことを頼んだんだ！」

俺は姉さんが好きだつた。けど姉さんと一緒にいられれば良かつた。それ以上は望んじやいけないことだつて知つたから望まなかつた。なのに何故、姉さんは死んだの？

「私は、欲張りだから、北斗と兄弟という関係だけじゃ嫌だつたの。本当の、堂々と周囲も認めてくれる恋人同士になりたかったの。だから私は死を選んだ。神様は、私の望みを理解してくれていたの。だから、北斗と兄弟としてじやなく傍にいさせてくれることを叶えてくれたのよ」

そんな……脱力感に襲われ何も言えなかつた。そこまで気がつかなかつた。姉さんは15年前そんなことを考えていたのか。6歳だったのに。もともと頭が良かつたけどそんなこと今まで考えていたなんて。

姉さんはそのまま、話を続けた。

「でも逆に北斗を混乱させちゃつたね。ねえ、北斗、これだけはわかつて。四方谷美波でも四守南でも変わらないよ。魂は一緒。私は、私なんだよ」

そのままにこりと笑い姉さんが近づいてきて唇にふわりと暖かいものが触れた。

「じゃ、またね！」

姉さんが微笑みながら闇夜の中へ駆けて行く。俺は暫く動けずに姉さんが去つたほうを見つめていた。

今、唇に何があたつた？キスされた？

思い出したら顔がかつと熱くなつた。俺はなんて馬鹿なんだ。

やっぱり姉さんは俺より一步も一歩もリードしてる。戸惑い悩むことしかできない俺。俺は、どうしたら良い？

現在の姉さんの気持ちに答えても良いのか？だつて、姉さんは俺とのために死んでまで傍にいようと決心してくれたのに…俺は迷つてる。

暫くボーッとして十分遅刻して行つたバイトはミスばかりで店長に驚かれた。

しかも、恋煩いかと冗談で訊かれ盛大に持つていた商品を引つくり返した。

次の日も講義には出たものの集中できなかつた。友人らはボーッとしてる俺を見て驚いていた。そんなに皆俺が驚くことが珍しいのか。そんな俺の頭の中を占めているのは姉さんだつた。もう何も障害なんていはずなのに悩んでいる自分がいる。

姉さんは姉さんなのに姉さんじやないんだといつも感心があるんだ。

「ただいま」

いつものように玄関を閉める。一階からものすゝい音を立て東が駆け降りてきたかと思つたらいきなりグーで殴られドアに背中を打ちつけた。

「つてー。何なんだよ」

「なんなんだよじやないだり。馬鹿兄貴」

東の声は怒氣を含んでいた。

「姉貴から聞いた。姉貴は兄貴のことがずっと好きだつたつて。兄貴も姉貴が好きだつたんだろ！何故今の姉貴に答えてやんねえんだよ」

「東兄さん、そんな風に怒つてもダメだよ。北斗兄さん、父さんも

母さんもリビングで待つてるよ」

リビングのドアのところで二口二口笑つ西也。

殴られて切れた口を拭うと立ち上がりリビングに向かつた。リビン

グに行くと父さんと母さんが穏やかな顔で俺を見つめていた。

「北斗、座りなさい」

父さんに促されいつもの席に腰を下ろす。

「東君、西也君も座つて」

母さんは優しくリビングのドアの前で立っていた2人を促した。2人が席に着くと父さんはゆっくり話し始めた。

「北斗、北斗と南が幼いながらに好きあつていたことは気づいていたよ。近親相姦がいけないと思わなかつた。子供の恋愛に首を突つ込む権利はないからね。ただ、世間から認めてもらえない、結婚もできない、子供も産めないそれが気がかりだつた。南はわかつていたんだろうね。それで死を選び、他人として北斗を好きになつたんだね。北斗、お前は今も南が好きなんだろ?」

優しい瞳で見つめる父さん。父さんも母さんも、俺と姉さんのことを許してくれていたんだ。

「父さん、確かに俺は今でも姉さんが好きだ。だけど、今の姉さんは四方谷美波つていう別の人間じゃないか?俺がずっと好きだつたのは四守南で……」

「まあ、確かに戸惑うでしょうね。けどね、北斗、大事なのはここよ

そつと母さんが自分の胸に手を置いた。

姉さんが言つていた『魂は一緒』という言葉が頭の中でリフレインした。

「母さん達もあの子に打ち明けられたときょと驚いたわ。けどあの子は四方谷美波でもあり、四守南でもあるのよ

「母さん」

「北斗兄さんは僕達に南姉さんのこといろいろ気にしてたみたいだけど僕達家族は誰もこの1~5年、僕は1~3年だけど、家族から姉さんを奪つた悪い奴なんて思つたことなかつたよ

「西也」

「何処までいつても姉貴は姉貴。兄貴が腹くくんなくてどうすんだ

よ。男だろ。姉貴ずっと待ってるぜ」

最後にぶつきらぼうに言つたのは東だった。その表情は笑っていた。

「ありがとう」

皆に告げ俺はリビングを飛び出した。姉さんに今すぐ会いたくて。スニー カーを突っかけ急いで玄関を開けた。

「あ。」

ちょうど姉さんが門の前にいた。

「ハロー。東が学校に忘れた宿題渡しに来たんだけど」

姉さんは東に渡すためのプリントを鞄から出そうとしていた。門の前に立つて思い切つて声をかける。

「そ、それより、姉さん、話があるんだ」

姉さんは俺を見て一瞬驚いた表情をしそぐ、にこやかに微笑んだ。

「良いよ。公園でも行こつか」

姉さんに誘われ公園まで歩く。誰もいない公園のベンチに座つた。「で、話つて何かな？」

俺は姉さんの前に立ち、軽く深呼吸した。

「俺、昔からずっと、今も姉さんが好きだ。家族に向ける好きじゃなくて、恋愛として好きなんだ」

「うん」

姉さんは笑つていた。今までの微笑ではなくすゞく幸せそうな微笑だつた。

「15年前にね、神様が、夢に出てきて言つたの。北斗と恋をしたいなら生まれ変わるしかないと。あの頃の私はすぐに了承した。多分今そうだったとしても了承する。天国に行つたら神様はすぐに転生させてくれたわ。なんかね、南に生まれる前も南になつてからも行いが良かつたからこういうことができるんだって言つてた」「行いが良かつたからか…俺は姉さんみたいになることができるんだろうか?姉さんみたいに望みを叶えてもらえる人はこの世にどのくらいいるのだろう。」

「でね、北斗!」

考えていた俺をよそに姉さんは嬉しそうに両手を差し出す。

なんだ？

「両思い記念に、ハグ！」

「え？」

「私、やつと北斗の恋人になれたんだよ。今ここに存在してこれが夢じやないことを実感したいんだよ」

「わかった」

マジな姉さんの目に俺は意を決し腕を伸ばした。その瞬間。ベンチの影の茂みが大きく揺れ俺は動きを止める。すると、人影が二つ出てきた。

「東、西也！」

東が気まずそうに笑い、西也が横で溜息をついた。

「あ、あははは」

「ほらあ、東兄さんが押すから」

「それなら西也が！」

言い合つ一人を俺と姉さんは顔を見合せ笑つた。

「東、西也おいで」

手招きするとおずおずと出てきた。東と西也を姉さんの両脇に立たせる。

「んじや。」

「え？」

「うおつ

「わつ」

ぎゅっと三人いつぺんに抱きしめた。姉さんはクスクス笑い、東は少し暴れていたが、俺の力に敵わないとわかると納得できなそうにおとなしくなり、西也は嬉しそうに珍しく声をあげて笑っていた。

俺はと言つと、

「北斗兄さん？」

「北斗？」

「兄貴…何泣いてんだよ？」

そう、泣いていた。15年前から泣けなかつたはずなのに三人の前で泣いた。嬉しくて笑顔でいるはずなのに自然と涙が零れた。これからは皆一緒に。もつ、誰一人欠けさせやしない。今度こそ皆一緒に生きていこう。

「あのや、15年前の約束覚えてる?」

帰りながら、東と西也の後ろを歩いていると姉さんに唐突に訊かれた。

「覚えてるさ」

『結婚しよう』だろ。忘れるはずがない。

「来月16になるんだけど」

「とりあえず、俺が卒業して就職するまで待つてくれ」姉さんはいつからこんなに積極的な人物になつてしまつたのだろう。でもま、俺の恋人になるために『死』を選んだあたり昔から積極的だつたのかもしれないな。

「約束守ってくれるの?」

「ああ。絶対守つてやるさ」

ふつと笑うと瞬間姉さんにキスをした。俺はしてやつたりという顔で走り出す。姉さんは一瞬呆然としていたが見る見るうちに真っ赤になつて怒鳴つた。

「北斗お！」

何事かと驚いた東と西也が振り返り姉さんを見る。

「どうしたんだよ。兄貴、姉貴」

「なんでもねーよ。さ、早く帰ろうぜ」

東と西也は訳がわからないというような不思議そうな表情をし顔を見合わせたが横を走り去る姉さんの嬉しそうな顔を見ると笑いあい走つてきた。

「なんか兄貴も姉貴もガキみてえ」

「そうだね。でも、良いんじやない」

二人の会話が後ろから聞こえる。

15年前姉さんを奪つたんだと恨んで「めんな、神様。俺たちは貴方のおかげで今、幸せだ。

4年後、俺たちは小さな教会に来ていた。

「うわあ、ドキドキすんなあ」

「何言つてるんだよ。東兄さんの結婚式じやないだろ?」「緊張してウロウロする東に西也が突つ込みをいれ俺は笑つた。

「北斗。やつと夢が叶うね」

母さんが嬉しそうに微笑んだ。俺たちは今日24年間の夢をかなえる。

姉さんは4年前のあの日帰つてからすぐ四方谷の両親に全てを話したらしい。二人は驚いたが全てを受け入れ抱きしめてくれたと聞いた。

そして姉さんは嬉しそうに「私には両親が一人ずついるのよ」と言つていた。それから家族ぐるみでの付き合い。四方谷の両親も俺を優しく受け入れてくれた。

「花嫁さんの用意ができましたよ」

花嫁の控え室から係員の人があつてきた。

俺たちは緊張しながら控え室に入る。

そこには真っ白なウエディングドレスに身を包んだ姉さんが佇んでいた。姉さんは振り返ると呆然としている俺たちに向かつてにこりと微笑んだ。

「南姉さん綺麗だよ!」

最初に口を開いたのは西也、その言葉につられて我に返り続けたのは東だった。

「姉貴…綺麗だ」

「ありがとう、西也、東。で、」

呆然としたままの俺をにらみつけ姉さんは近寄つた。

「北斗クンは何か感想ないのかなあ?」

「え…」

ちらつと東と西やを見ると、一矢一矢としていた。はあと溜息をつく。

「綺麗だよ、姉さん」

本当は綺麗といつ言葉だけじゃ言い表せないんだけど。だが、姉さんは眉をしかめた。やはり言葉が足りなかつたのか？姉さんはへん字に曲げた口を開いた。

「姉さんじやないでしょ、つー。」

参つたな、姉さんの上田遣には弱いんだ。

「昔は南ちゃんつて呼んでくれたじやない」

田を潤すやる。俺はまた、はあと溜息をついた。姉さんは勝てないな。

「綺麗だよ…ミナミ」

俺にひとつは南でもあり美波もあるから。姉さん、こやミナミは満足やうに微笑んだ。

「あ、姉貴田薬持つてる」

小さな声で東が呟く。ミナミはキッと東を睨み西やが東の脇を突いた。

「東兄さん！」

まあ、そんなこいつたひつと思つたよ。

「道わん、そろそろ式場のほうへゆづれ」

係員がドアを開け出でると東と西やは走つて出て行つた。

「北斗」

「ん？」

「今日のバージンロード。パパとお父さんと歩くからね」

「わかってるよ」

パパといつのは四方谷のお父さん。お父さんは俺たちのつまつ四守の父さんのこと。これは式前から決まってたけどミナミは嬉しそうに告げた。

「やあ、行こつか」

ミナミに手を差し出す。

「うん、幸せにしてね

そっと俺の手をとる。

「勿論

手をしつかりとつなぎ俺達は式場へと向かう。
もう決してこの手を離さない。

そっと空に向かつて心の中で呟く。

なあ、神様俺たちは多少遠回りしちまつたけどこれで良いんだよな
？神様はこれを望んでいてくれたんだよな。

俺たちにこんな幸せをくれてありがとう、神様。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0609e/>

ごめんな、神様2

2011年1月28日04時40分発行